自立活動グループ⑧

自閉症の子どもの対子ども社会性を改善する試み
～RDIプログラムを参考にした小集団活動を通して～

河野俊寛

1．はじめに

自閉症は、社会的な相互交渉の質的な障害、コミュニケーション機能の質的な障害、及び、活動と興味の範囲の著しい限局性の三つを主訴とする行動的症候群と定義されている（DSM－Ⅳ－TR、2002）。そして、この定義の中の社会的な相互交渉の質的な障害の中に、仲間関係を作る能力の著しい不足、という項目がある。自閉症の子どもが、対成人社会性に比較して対子ども社会性に困難さを抱えていることは、一般的に経験することである。しかしその障害に対しては、中核障害であるとして直接アプローチするのではなく、周りの環境を整備することによって障害特性が示す困難さを緩和しようとされることがこれまで多かった（例えば、ショプラー、2003；Quill、1999；佐々木、2002）。

それに対して、RDIというプログラムでは、対人関係能力を直接発達援助することを目的としている。もちろん、これまでにも、自閉症の子どもに対して、小集団活動を通してその社会性を改善しようとする試みはなされてきている（例えば、坂口ら、2002；氏家ら、1995；藤井ら、1980；太田ら、1992）。しかし、プログラムとして提示されているものは，SCERTS（サーツ）モデル（Prizantら、2003）を除いてこれまでなかった。

今回、自立活動の時間における指導で、3人の自閉症の生徒に対して、RDIの活動課題を参考にし、その対子ども社会性を改善することを目的にした指導を行った結果若干の成果が見られたので、その概要について報告する。

2．RDIについて

RDIはRelationship Development Interventionの略で、Steven E. Gutsteinが提唱している、自閉症児の対人関係能力発達のための療育プログラムである。RDA（Relationship Development Assessment）というアセスメントに基づいて実態把握し、6レベル、24ステージの支援プログラムで構成されている。このプログラムの成果は、Gutstein（2003）に報告されている。それによると、RDIプログラムに参加した17名の自閉症児と、他の療育プログラムに参加した14名の自閉症児を、ADOS（Autism Diagnostic Observation Schedule）（ADOSについては、ショプラー・メジボブ、1995を参照）の変化と在籍学級での自立性の変化によって評価した結果、両者には有意な差が見られたとある。

RDIは、現在、Connection Center（4120Bellaire Boulvard, Houston, Texas, 77025）というセンターを中心に、家族対象のワークショップ、専門家対象のワークショップ等を全米各地で開催しながら、そのプログラムの普及を図っている。これらのことはホームページ（http://www.connectionscenter.com）に詳しい。なお、日本では、名古屋市児童福祉センターの白木孝二氏がアメリカで行われたワークショップに参加した後、RDIについて講演してその内容を紹介している。著者も、その白木氏の講演によってRDIの存在を知った。

3．日本における先行研究例

藤井ら（1980）は、知的障害を伴う自閉症児に対して、非指示的集団遊戯療法と指示的な集団遊戯療法とを比較し、非指示的非構造的遊戯場面よりも指示的構造的遊戯場面で対人的能動行動は生起しやすいこと、指導者の指示に対する建設的な反応の生起率は、非指示的非構造的遊戯場面よりも指示的構造的遊戯場面で高い傾向があったことから、発達水準の低い自閉症児への小集団遊戯指導では、物理的心理的に構造化された遊戯場面と指導者の積極的な指示が対人的・集団参加行動の形成・生起に有効である、と指摘している。

永井（1992）は、東大デイケアの紹介の中で、集団での適応行動を育てることと、対人認知を育てて対人関係を豊かにすることを目標にしたグループ学習を紹介している。そして、『認知発達治療の実践マニュアル』（1992）で、小集団活動の例を多く紹介している。

坂口ら（2002）は、高機能自閉症児に対して小集団指導を行い、大人の介入があることによって、他児との場の共有、他児の関心への注目、自己－他者間の意見の違いへの気づき、対等なやりとり関係が可能となったことを報告している。

4．自立活動の時間における指導

（1）生徒の実態

A男　中学部3年　自閉症

KIDS（平成15年5月15日実施）：理解言語5：10　表出言語5：10　概念6：6
対子ども社会性4：4　対成人社会性3：3　総合5：6

WISC－Ⅲ（平成16年10月18日実施）VIQ51　PIQ94　FIQ68

B男　中学部2年　自閉症

KIDS（平成15年6月4日実施）：理解言語6：1　表出言語5：10　概念6：8
対子ども社会性4：9　対成人社会性5：9　総合5：9

WISC－Ⅲ（平成16年10月19日実施）VIQ51　PIQ79　FIQ60

C男　中学部1年　自閉症

KIDS（平成16年7月5日実施）：理解言語6：10　表出言語6：10　概念6：8
対子ども社会性4：6　対成人社会性6：6　総合6：3

WISC－Ⅲ（平成16年10月22日実施）VIQ58　PIQ46　FIQ47

表出言語DAがA男とB男は5：10、C男は6：10というKIDSのプロフィールを見てわかるように、3人とも高い発話能力を持っている。また、理解言語の、A男5：10、B男6：1、C男6：10というDAからは、3人の高い理解力もわかる。しかし、対子ども社会性DAは、それぞれA男4：4、B男4：9、C男4：6と、3人が似たレベルで、3人とも他の領域に比較して苦手な領域である。

学校の休み時間には、A男は一人で本を読んでいることが多く、B男はパソコンでゲームをしており、C男は花壇の世話をしているか教師とかかわって過ごしているというように、3人は対大人との関係はあっても対子ども同士の関係は少ない生徒である。

（2）指導時間

毎週水曜日2時間の指導を行った。1学期に7回、2学期に3回指導を行った。

（3）指導内容

かけ声と同時に一斉に札を出すというやり方でばばぬきを行う、２人組で声をかけあって台から同時に飛び降りる、リードする人にあわせてタンバリンを叩く、黒ひげ危機一髪ゲームを交互に行う等、相手を意識し、相手に合わせる時は合わせ、交互に行う時は相手の活動の終了を予期する必要がある活動を、１回の指導時間中に４～５種類行った。２回目の指導時間までは指導者である著者がリードしたが、３回目以降は、できるかぎり生徒同士で交互にリードさせるようにした。生徒同士では相手に合わせることができなかった時は、著者が介入し、再度やり直しをさせた。

（４）指導結果

Gutstein は ADOS で RDI の成果を評価しているが、日本には自閉症児の社会性について評価する標準的な検査はないので、今回は、各指導時間の後半にティータイムを設けて自由会話を行い、その時の他生徒への注視と話しかけの頻度を評価の尺度とした。具体的には、各指導時間のビデオから、ティータイム時に３人とも着席している10分間を選び出し、３人それぞれが「見る」相手とその頻度、及び「話しかける」相手とその頻度を、１／０サンプリング法で観察を行った。サンプリングの時間間隔は10秒とした。

１回目と６回目の結果は図１から図３の通りである。なお、観察記録の信頼性を確認するために、本研究に関係のない金沢大学の大学院生にビデオを見てもらい、著者と同じやり方で観察記録をしてもらった。著者と大学院生の記録の一致度は、カッパー係数.79で、信頼性があるといえた。

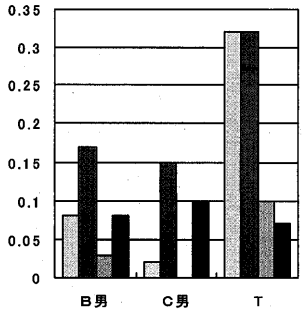

図１　Ａ男の結果

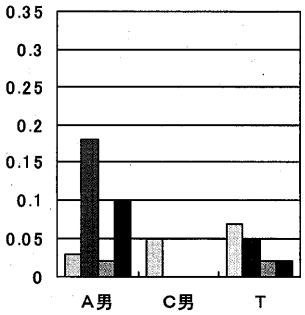

図２　Ｂ男の結果

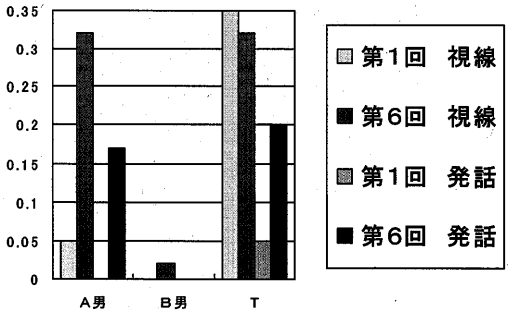

図３　Ｃ男の結果

注）数値は、観察された対人行動の回数をサンプル間隔60で除した数である。
　　なお、Ｔは著者である。

１回目の授業では、Ａ男とＣ男は、Ａ男がＢ男へ、またＣ男がＡ男へ視線をやることはあるが、二人とも大人である著者への視線が圧倒的に多かった。また発話も、Ａ男はＢ男に対して数回あるが、Ｃ男は対子どもの発話はなく、二人とも著者へ向けての発話が主であった。それに比較して６回目の授業では、Ａ男からＢ男、Ａ男からＣ男、Ｂ男からＡ男、Ｃ男からＡ男へと、対子どもの視線、発話とも増加している。特にＡ男は、対大人への視線、発話が減少しているのに対して、Ｂ男、Ｃ男への視線、発話とも大きく増加している。Ｃ男は、Ａ男への視線と発話は増加したが、Ｂ男に対しては、視線が増加しただけで発話の変化はなかった。Ｂ男は、Ａ男にのみ視線と発話の増加がみられた。エピソードとしては、７月の中学部会で、Ａ男とＢ男とのやりとりが休み時間にも見られるよう

になったことが、B男の担任教諭から報告されている。

5．考察

指導結果からは、RDIで使われている、相手を意図的に意識させる活動課題は、自閉症の子どもたちの対子ども関係を改善する可能性があると考えられる。このことは、先行研究の、意図的な大人の介入がある小集団活動が自閉症児の社会性の改善に効果があった、という報告とも一致する。

しかし本研究は、あくまでもRDIの活動課題を参考にしての試みであり、RDIプログラムに則ったものではない。RDIでなされるRDAという評価も行わずに実施しているし、指導結果の測定も標準化された方法を使っていない。今後機会があれば、RDIプログラムに即した指導を試みてみたいと考えている。

＜参考文献＞

・アメリカ精神医学会（高橋他訳）（2003）．DSM－Ⅳ－TR精神疾患の分類と診断の手引．医学書院．
・Gutstein, S.E. (2000). Solving the Relationship Puzzle. Future Horizons Inc.
・Gutstein, S.E. & Sheely, R.K. (2002). Relationship Development Intervention with Young Children. Jessica Kingsley Publisher.
・Gutstein, S.E. & Sheely, R.K. (2002). Relationship Development Intervention with Children, Adolescents and Adults. Jessica Kingsley Publisher.
・Gutstein, S.E. & Sheely, R.K. (2002). Relationship Development Assessment Administration Manual. The ConnectionsCenter.
・Gutstein, S.E. & Sheely, R.K. (2002). Relationship Development Assessment Intervention Planning Forms. The ConnectionsCenter.
・Gutstein, S.E. (2003). The effectiveness of Relationship Development Intervention to remediate Experience－Sharing deficits of autism－spectrum children (pre－publication manuscript). http://www. connectionscenter. com.
・藤井省吾・平井保男（1980）．精神遅滞を伴う自閉的児童の小集団遊戯指導に関する実験的研究．岡山大学教育学部研究集録，通号54，9－18.
・太田昌孝・永井洋子編著（1992）．自閉症治療の到達点．日本文化科学社．
・太田昌孝・永井洋子編著（1992）．認知発達治療の実践マニュアル．日本文化科学社．
・Prizant, B. M., Wetherby, A. M., Rubin, E. & Laurent, A. C. (2003). The SCERTS Model. Infants and Young Children, Vol.16, No.4, pp 296－316.
・Quill, K.A．編（安達他訳）（1999）．社会性とコミュニケーションを育てる自閉症療育．松柏社．
・坂口博美・家山華子・伊藤良子（2002）．自閉的傾向をもつ高機能な発達障害幼児の対人関係の発達（2）．東京学芸大学特殊教育研究施設研究報告，第1号，45－53.
・佐々木正美編集（2002）．自閉症のTEACCH実践．岩崎学術出版社．
・E．ショプラー編著（田川元康監訳）（2003）．自閉症への親の支援．黎明書房．
・E．ショプラー・G.B．メジボブ編著（1995）．自閉症の評価．黎明書房．
・氏家武他（1995）．自閉症ハイリスク児の小集団療法に関する臨床的研究．安田生命社会事業団研究助成論文集，31（2），108－110.